

平成三十年度

国

語

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間には「したいこと」、「するべきこと」、「できること」の三つしかない。このうち、できるのは「できること」だけである。そうであれば、できることだけをするとというのがシンプルな生き方だろう。といって、現状を変える努力をすることがいけないわけではない。

闘病中の人はたとえ^①がんが望めないとしても、今の自分より少しでもよくなりたいと思うだろう。また生命の危険を伴う手術を受ける決心をし、リハビリにも励む。

このような現状を変える努力は自分が自分のためにするものであって、他者と競争するためではない。できることと、するべきことや、したいこととのギャップが劣等感である。この意味での劣等感、そして、その劣等感をコクフク^②しようとする努力をアドラーは「優越性の追求」と呼んだが、これらはいずれも健全な劣等感、健全な優越性の追求である。

ところが、この優れようとする努力が他者との競争になると、一転して不健全なものになる。ライバルがいることはたしかに励みになるが、そのライバルに勝とうと思うと、健全な劣等感、健全な優越性の追求とはもはやいえなくなる。競争は、精神的な健康を損ねる最大の要因になる。

B

入学試験のような競争であっても、基本は自分の問題なのであって、試験を受けて目指す学校に入学できるかどうかは単なる結果に過ぎない。入学すること自体を目標に勉強するのではないのである。

他者を仲間であると思ふことができれば、²他者と競争しようとは思わないだろう。

動物は単独でいるよりも群れでいる方がはるかに生き延びることができる。このことにはダーウィンも気づいていたとアドラーは指摘している（『子どもの教育』）。人間の場合も、協力することなしには生きていくことはできない。生まれたばかりの子どもは親の保護がなければ生きていけない。反対に、子どもの介護が必要な親もいる。

しかし、それは生物学的あるいは社会的に必要というだけではなく、先にも見たように、自分が存在することの根拠として、自分の存在を基礎づけるために必要なものである。

たしかに、競争はよく見られるが、正常であるとはいえない。アドラーは戦争は競争の最たるものだと思える。第一次世界大戦に軍医として従軍したアドラーは、人が戦場で殺し合うのを見た。それにもかかわらず、競争や戦争は人間の本性ではないと考え

A

、痛みを伴う、

た。

競争は人間の精神的な健康をもっとも損ねる。アドラーはホッブズの「万人の万人に対する闘い」という言葉を引き、これは普遍的にダトウするものではないと指摘している（『教育困難な子どもたち』）。

ホッブズは、人間が自己保存欲を持っており、他者を圧倒しながら自分の権利と幸福を求めようとすることを「自然状態」と呼んでいる。しかし、他者と競争し、その競争に勝つても、自分だけが幸福になることはできない。

先に見たように、今の自分よりも優れたいたいと思ひ、優れるための努力をすることは健全である。誰もが優れようとするという意味での優越性の追求も、他者と競争しないのであれば、問題なく健全なものとなる。

C、優越性の追求という言葉が、上に向かうイメージをカンキするのであれば問題である。

アドラーが、人生は目標に向けての動きであり、「生きることは進化することである」という時、この進化は上ではなく、前に向かつての動きである。人は皆それぞれ出発点と目標を持っている。その目標に向かつて前に進んで行くのだが、その際、ある人は速く、ある人はゆっくり進んで行く。そこに優劣はない。闘病中の人が今よりも少しでもよくなりたいと思つてリハビリに励む時は、他者は関係ないので、他者と競争して他者より上に立つことは問題にならない。

時には立ち止まったり、逆走したりすることがあつても、基本的に前に進んでいるのであれば、それがどんな道であつても、ゆっくり進むことも速く進むこともできる。自分の生き方は独自のものなので、誰か他の人の生き方を真似る必要はないと考えることができる。自分ではない誰かに「なる」必要はなく、この私で「ある」ことで満足できる。

アドラーは、「不完全である勇氣」という言葉を使っている。ここでいう「不完全」は、人格についてではない。新たに手がけたことについての知識や技術についての「不完全」である。

その不完全は、最初からできないと決めてかかつて挑戦しない人には思いもよらないことかも知れないが、かなりの程度、完全に近づけることができる。

とはいえ、新しいことを始めたときには、それができなくても当然なのに、できない自分を受け入れられないことがある。ことに歳を重ねてから新しいことに挑戦する時には困難を感じる。

それまでの人生で長く何かをやり続けてきた人であれば、ある領域では自分が優れていると思つていたのに、新しいことに着手

すれば、たちまち何もできない自分と向き合わなければならなくなる。だが、何もできなくても、そもそも仕方がないのである。そんな自分を受け入れることから始めるしかない。

何かを習得することに限らず、自分が不完全であることを受け入れることができる人は、自分の価値を理想からの減点法ではなく、現実からの加点法で見ることができ、加齢と共にあれもこれもできなくなったとしても、そのことを嘆く必要はないし、自分の価値を何かができることに見出すこともなくなる。

その上で、もはや他の人と競争する必要もないのだから、新しい単語を一つでも覚えられたり、少しでも楽に身体を動かせたり、泳げたりするようになれば、そのことが喜びとなり、人生は豊かなものになる。

先にも引いたが、アドラーは次のようにいつている。

「自分に価値があると思う時にだけ、勇気を持てる」(Adler Speaks)

ここでいわれる「勇気」には二つの意味がある。

一つは課題に取り組む勇気である。なぜこのことに勇気があるかといえば、課題に取り組むことで、結果が明らかになるからだ。仕事であれば、ある課題に取り組んで、結果が出ないかも知れないと恐れることもあるだろう。しかし、結果が出るのを恐れるあまり何もしないのでは、単に仕事ができないだけである。結果を恐れずに課題に取り組くまなければならない。

もう一つは、対人関係に入っていく勇気である。対人関係の中に入っていけば、嫌われたり、ニクまれたり、裏切られたりすることがある。そのようなことを経験するくらいなら、対人関係の中に入っていない方がいいと考える人がある。だが、先にも見たように、生きる喜びも幸福も対人関係の中でしか得ることはできないのだから、幸福になるためには対人関係の中に入っていく勇気が必要である。

このような勇気をもつためにも、自分に価値があると思えるようにならない。

(出典 岸見一郎『幸福の哲学 アドラー×古代ギリシアの智慧』講談社現代新書による)

(注) アドラー——アルフレッド・アドラー。オーストリア出身の精神科医、心理学者、社会理論家。

問一 〰線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A～Cに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ただし イ むしろ ウ けつして エ だから オ たとえ

問三 線1「優越性の追求」とありますが、どういうことですか。本文中から二十八字で抜き出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問四 線2「他者と競争しようとはしない」とありますが、そうなるために必要なことは何ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他者を圧倒できる権利と幸福を得ること。

イ 世の中から戦争という手段をなくすこと。

ウ 他者を協力できる仲間であると見なすこと。

エ 人間の持つ自己保存欲を満たしてやること。

オ 自分が存在することの根拠を持つこと。

問五 線3「前に向かっての動き」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他者の先を越すことに価値を置こうとすること。

イ 自分の目標に向かって進んで行こうとすること。

ウ 他者とは違う出発点を設定しようとする事。

エ 他者に目標とされる独自性を持つとすること。

オ 目標にできるだけ早く到達しようとする事。

問六 線4「不完全である勇氣」とはどういう勇氣ですか。四十五字以内で説明しなさい。

問七 線5「このような勇氣」とありますが、どういう勇氣ですか。四十五字以内で説明しなさい。

【二】次の文章は、ワイン工場を経営していた母が急死したため突然工場を継ぐことになった双子の姉（光実）と弟（歩）の物語である。よく読んで、後の問いに答えなさい。

ワインの瓶を棚に並べながら、壁の時計を見る。午後六時で、外はもう暗い。十月に入ってから陽の落ちるのがはやくなった。扉の上部に嵌った小さな窓は、夜を四角く切り取ったように見える。

明日から、新酒の販売が始まる。毎年この季節を楽しみにしているお客さんも多いそうで、光実は張り切っている。

自分がつくったものが商品になるなんて感動的やろ、と隣の棚の陳列を担当している光実が言うが、歩は瓶を落とさないように気をつけるのに精いっぱい、返事をする余裕がなかった。

「自分がつくった、っていうか、俺ただ日野さんに怒鳴られておたおたしとただけやしな」

陳列を終えた棚をふたり並んで眺めながら、ようやく言えた。そんなことないよ、と光実は言うが、歩と視線を合わせようとしていない。

ただ以前のように、たかが酒ではないか、とはもう、思わなくなった。

「めっちゃくちゃ、手かかっているもんな。できあがるまでに」

「うん」

やっとわかった？ と笑って、光実はまた店内を見まわす。

月雲ワイン、と呼ばれているが、それは月雲市内でつくられるワインの総称のようなもので、商品のひとつひとつに、名前がある。すべて母が考えたそうで、その名はすべて月や星に関係している。たとえばマスカット・ベリーAは『皓月』、メルローは『幾望』、シャルドネのスパークリングは『Spica』というような按配^{あんばい}になっていて、すべての棚を眺め終えて、うーん、と歩は首をひねる。

「なに？」

光実は怪訝^{けげん}な顔をしている。

「いや、この漢字の名前がついているほう、なんかぱつとせんな、と思って」

どうなん、と歩は指をさす。白地にやや大きめに漢字ふた文字が書かれたラベルはシンプルだが垢抜けぬデザインだと、歩の目

にはうつる。

「なんかもうちよつと、かつこいいやつに変えたほうがよくない？」

なにげなく言つたつもりだった。世間話の延長というか、そういう。しかし光実²はぴくりと眉^{まゆ}を上げ、なんで？ と低い声で言う。

「これはこのままでええって」

「え、光実はこれがかつこいいと思つてんの？」

光実は眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せて、いや別にかつこいいとは思つてないけど、と呟^{つぶや}く。

「だってこれ、お母さんが考えたやつやもん」

だから変えたくない、と言う光実の声がかすかに震えているので、歩は困った。母を思う光実の気持ちをわかつてやりたいと思う。わかつてやりたいがしかし、それとこれとは分けて考えるべき事柄³なのではないだろうか。

「ラベルで判断するとかおかしいわ。見た目をかつこよく整えたって、なかみは一緒やろ。うちのワインは絶対おいしいもん。わかる人にはわかるはずや、飲めばわかるはず」

光実は頬^{ほお}を紅潮させて、わかるはず、を連発する。

「いや、だから……」

まず「飲んでみたい」っていう気持ちにさせなあかんやろ。そのために入れものをつつこよく整えることの一体なにが悪いねん、と歩は慎重³に言葉を選びながら光実に伝えようとしたが、光実の眉間の皺はどんどん深くなるばかりなのだつた。

「とにかく、ラベルはこのままで行くから」

ああそうですか、と力なく答えながら、広田、と心の中で呼んでいた。広田。こいつはこういう強情な女やぞ。⁴ほんまにこいつでええんか、お前は。

すこし前に、広田がものすごい長文のメールを送ってきた。無口な広田は、面と向かつて乃至電話で話をするよりも文章で自分の考えを伝えるほうが楽であるらしく、基本的にいつも文字数が多い。だが今回は特別に長かつた。経文かと思つた。

経文⁴を要約すると、自分は光実に好意を持っている。もし自分が光実と交際をするようなことになったら歩はどう思うか、嫌ではないか、もちろん光実にたいしての気持ちはいいかげんなものではないが歩は大事な友人であるので、自分としては歩の気持ち

をいちばんに考えたい所存である、ゆえに、どうか忌憚^{きたん}なき意見を聞かせていただきたい、というような内容だった。

まるで結婚したいと思っている女がいて、その女の連れ子を氣遣っているような文章だなど思いながら、そういうことはお互いの気持ちがいちばん重要なので、広田と光実がしたいようにすればいい、俺は光実の連れ子ではないのでなんとも思わない、という趣旨の返信をした。

以来広田からの連絡はないし、光実もなにも言わないので、どのような段階までふたりの関係が進展しているのかはわからない。広田が光実に対してそこはかとなく好意のようなものを抱いているらしいことは、歩も以前から気がついていたりもした。

光実の広田への思いについては、まったくわからなかった。肉親の色恋沙汰^{ざた}を知ったり想像したりするのはたいへんに気色が悪いことなので、だから意図的に目を背けてきたとも言える。

で、結局広田とどうなん、などと問えばますます光実の機嫌を損ねるような気がして、歩は陳列棚の値札の位置をずらしながらこの場をやり過ごそうとする。

値札の脇には小さなポップが揺^⑤れている。商品の説明が短く書かれたもので、それをひとつひとつ眺めながら、いつか、新しい商品とか開発したりしてみたいよなあ、とぼんやりと思う。このワイナリーではじめてつくるような、新しいワイン。まだまだ先の話だろうが、いつか。

ポケットから便箋^{びんせん}を取り出した。もう既に何度も読んでいるから、内容は暗記してしまっている。すこし前に、倉田先生から手紙^⑤をもらっていたのだった。

先日はありがとう、でその文章ははじまっている。ワインを配達しに来た歩くんの様子を見て安心しました。教え子が立派に働く姿を見るのは、うれしいものです。奇跡はめったに起きないからそう呼ぶのでしょけれど、あの日歩くんがワインと一緒に、ちいさな奇跡を運んでくれたような気がしています。ありがとう。

しかたなく家の仕事をはじめた、とあの時、言っていましたね。昔から憧れていた職業に就く、ということが人生のひとつの理想のように語られることがよくあります。歩くんもしかしたら、そう思っているのかもしれない。

けれども歩くん、就きたかった職業でなくても、真摯^{しんし}に、一途に、日々取り組んでいけるとしたら、それはとても美しい生きかただと、私は思います。

便箋を丁寧に畳んで、またポケットにしまう。なんと書こう、と思い悩んで、いまだに返事を出せずにいる。

問一 ①⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 a・bの語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a おたおたする

ア どきどきする
イ 落ちこむ
ウ 驚く
エ あわてる
オ いらいらする

b そこはかとなく

ア せつなく
イ なんとなく
ウ ぎこちなく
エ かぎりなく
オ どうしようもなく

問三 線1「ただ以前のように、たかが酒ではないか、とはもう、思わなくなった」とありますが、なぜですか。五十字

以内で説明しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問四 線2「光実はいくりと眉を上げ、なんで? と低い声で言う」とありますが、このときの光実の気持ちはどのようなものですか。六十字以内で説明しなさい。

問五 線3「それとこれとは分けて考えるべき事柄なのではないだろうか」とありますが、「それとこれ」とはそれぞれ何を指しますか。適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア ワインのおいしさはわかる人にはわかるという絶対的な自信。

イ どのようなラベルをかつこいいと感じるかという個人的な好み。

ウ 多くの人に自分たちのワインを飲んでもらうための現実的な方策。

エ 子どもは親を大事にしなければいけないという道徳的な教え。

オ 母の残したデザインを大切にしたいという私的な思い入れ。

カ 良くないと思っているのにラベルを変えようとしないう消極的な姿勢。

問六——線4「ほんまにこいつでええんか、お前は」とありますが、ここには歩のどのような気持ちが表れていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 話をするのが苦手な広田が、意志を曲げないがんこな光実と上手く交際できるかどうか心配に思っている。
イ 広田が、自分よりもはるかに気の強い光実に対し、本当に好意を持っているのかを疑わしいと思っている。
ウ 広田に好意を持っているかわからないのに、光実と交際したいと願う広田のことを気がかりに思っている。
エ 友人の広田と姉の光実が交際を始めることなど考えたくないもので、何としてもやめさせたいと思っている。
オ 穏やかな広田には強情な光実よりふさわしい女性がいるはずなので、交際を考え直すべきだと思っている。

問七——線5「倉田先生から手紙をもらっていた」とありますが、先生はどのようなことを伝えたかったですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 就きたくなかった職業に就かざるを得なかった歩に深く同情し、毎日熱心に働くことにこそ価値があるのだと慰めて何とか労働意欲をわかせようとしている。
イ 本当の気持ちを言うのが照れくさくて、嫌々ながら家業を継いだと言う歩のことをかわいらしいと感じ、日々まじめに働くように応援したいと思っている。
ウ 家業を継ぐことをきっぱり断れず、今の仕事をだらだらと続ける自分を責めている歩にいらだちを覚え、働くことの厳しさを教えようと思っている。
エ 自分は嫌だったのにむりやり家業に巻き込んだ光実をうとましく思う歩に、毎日取り組める仕事があることがどれだけありがたいことを伝えようとしている。
オ 望まない職業に就いてしまったと感じている歩に、どんな仕事でもひたむきに取り組むことが素晴らしいのだから、がんばってほしいと思っている。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合により、一部表記を変えた部分があります。)

(とても貧しくて)

(男は雨が降って外に出られずいたところ、女は「どのようにして物を食べさせよう」)

今は昔、身いとわろくて過ぐすをんなありけり。時どき来る男来たりけるに、雨に降りこめられてゐたるに、「いかにして物を

(日暮れ頃になった)

(女は自分の境遇がとても情けなくて、「私が頼み申し上げている観音様、お助け下さ

食はせん」と思ひ歎けど、すべき方もなし。日も暮れ方になりぬ。いとほしくいみじくて、「わが頼み奉りたる観音、助け給へ」

(親が生きていた頃に使っていた女の使用人が、とてもおいしそうに)

(おれに与える物がなかったのだ)

と思ふ程に、わが親のありし世に使はれし女従者、いときよげなる食物を持て来たり。うれしくて、よろこびに取らすべき物のな

(持っていたのを、与えた)

かりければ、小さやかなる紅き小袴を持ちたりけるを、取らせてけり。我も食ひ、人にもよくよく食はせて、寝にけり。

(夜明け前に)

(去った)

(おまつり申し上げていた観音様を、お参りしよう)

(ついたてを立てて、中に置き申し上げていた観音様

暁に男は出でて往ぬ。つとめて、持仏堂にて、観音持ち奉りたりけるを、見奉らんとて、丁立て、据ゑ参らせたりけるを、帷子

を、布を上げてお参りする)

(肩にかけた状態でいらつしやった)

引きあけて見まゐらす。この女に取らせし小袴、仏の御肩にうち掛けておはしますに、いとあさまし。昨日取らせし袴なり。あは

れにあさましく、おぼえなくて持て来たりし物は、この仏の御しわざなりけり。

(出典 『古本説話集』による)

問一 線 a 「をんな」、b 「見まゐらす」、c 「あはれに」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二 — 線1「すべき方もなし」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 女は時々来る男に何か食べさせてほしいと頼むが、男は出かけることもできず、途方にくれているということ。
 イ 男に何か食べさせたいと思うが、女は貧しくて食べ物を手に入れることができず、どうしようもないということ。

ウ 時々来る男に対して貧しい女は食べ物に分けてもらいたいと思うが、頼むこともできず、困っているということ。

エ 男は貧しくて困っている女を助けてやりたいと思うが、女は男ではなく観音を頼るので、仕方がないということ。

オ 男に食べさせる物がないことを情けなく思う女は、観音に助けを求めるしかないとき直っているということ。

問三 — 線2「つとめて」・3「あさまし」の文中における意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

2 つとめて		3 あさまし	
ア	早朝	ア	不気味なことだ
イ	正午	イ	ありがたいことだ
ウ	昼下がり	ウ	情けないことだ
エ	夕方	エ	驚くべきことだ
オ	夜中	オ	ゆかいなことだ

問四 — 線4「持て来たりし物」は何を指しますか。本文中から九字で抜き出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。)

問五 本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 信心深い女従者は、女からのお礼の品である小袴を観音の肩に掛けて拝んだ。
 イ 男は食べ物をもったお礼をするために観音を拝みに行き、小袴をお供えた。
 ウ 食べ物を持って来た女従者の正体は、女が頼りにして拝んでいた観音であつた。
 エ 仏は男に姿を変えて女の前に現れ、女が食べ物を与えてくれるかどうか試した。
 オ 男は食べ物をもらうてうれしかったので、お礼として紅色の小袴を女に渡した。

11

問五

	問五
--	----

右につめて書いて下さい